愛知教育大学研究報告，55（人文・社会科学編），pp. 101～109， March, 2006

バルバッスゥ親父のフェミニズム談義
～アナキスト新聞『ル・リベルテール』1911-12年～

見崎恵子

Keiko MISAKI

社会科教育講座

はじめに

19世紀末以降20世紀半ばまで続いたフランス・アナキストの主要な新聞の一つ『ル・リベルテール*Le Libertaire*』[1] において，「今，なんといっても重要な出来事は，キュロットだ。」で始まるフェミニズム論議が，「バルバッスゥ親父Le Père Barbassou」のペンネームでスタートしたのは，1911年3月11日号からである。いわゆる第一波フェミニズムのなかで，英米に比べて大きな遅れをとり，また弱小・穏健さによって特徴づけられてきたフランスの女性運動が，ようやく勢いを増しつつある時期であった。

本論は，この「バルバッスゥ親父」の名で掲載されたコラム「一農民の随想」が，女性問題やフェミニズムをどう論じているのかを検討し，それによって当時のアナキズムとフェミニズムとの関係の一端を明らかにすることを目的としている。

すでに筆者は別稿[2] で，20世紀初頭フランスにおけるアナキズムの集大成と言われるS. フォール（Sérbastien Faure 1858-1942）監修の『アナキズム百科事典』を対象に，アナキストの女性論及び女性解放論について分析を試みたが，女性の権利要求，とくに参政権要求に関するアナキストの否定的ないし消極的立場を紹介するにとどまった。今回検討する『ル・リベルテール』の一連のコラムは，この女性の政治的諸権利を含むフェミニズムの主張を，会話や手紙形式で取り上げて論じ，ときにはフェミニスト的とも言える議論を展開していて興味深い。

以下，まずこのコラムの執筆者の経歴及び『ル・リベルテール』における執筆状況に簡単に触れた後，「バルバッスゥ親父のフェミニズム談義」の全体像，そこでの論点の検討を行い，最後にフェミニズム関連の他のアナキストの記事との比較によって，バルバッスゥ親父が示すフェミニズムの特徴を明らかにしたい。

1.「バルバッスゥ親父」と『ル・リベルテール』

(1)「バルバッスゥ親父」の経歴

コラムを「バルバッスゥ親父」の名で執筆したのは，南フランスのLot-et-Garonne県生まれの活動家，アンリ・ボージャルダン（Henri Beaujardin 1865-1928）である。貧しい農民の家に育ち，早くから奉公人，労働者として各地を転々とするなかで階級意識に目覚めた，いわゆる「たたき上げ」の活動家である。それゆえに，理論的な書物やパンフレット等を多くを残した著名なアナキストと異なり，J．メトゥロンの『フランス・アナキズム運動史』に登場することもなく，また同編集の『フランス労働運動史人名辞典』においても簡単な記述があるだけである[3]。しかし，『ル・リベルテール』だけでなく，『ル・ペール・ペナール*Le Père Peinard*』など他の新聞にもしばしば寄稿しており，「バルバッスゥ親父」の名はアナキストの間でそれなりに知られていたと思われる[4]。

ロシア革命以降，ボージャルダンは共産主義へと傾斜し，フランス共産党に入党した。しかし，アナキズムと完全に決別したわけではなかったようで，1928年1月4日に死去したボージャルダンを偲んで，同年1月20日付『ル・リベルテール』紙は，アジャンAgenからの通信として，以下のような文章を掲載した。

「*老活動家亡くなる*：かつてのアナキスト活動家で古い同志ボージャルダンが亡くなった。大腿切除手術後に罹った重い病気を患っていたのである。・・・彼の書いたものは常に革命的姿勢に貫かれ，その辛辣な筆は，いつも虐げられた人々のために捧げられた。

かつてあれほど強力だったアジャンのアナキスト・グループが姿を消したことを嘆き，以来孤立してしまった彼は，自主独立を保つことを条件に共産主義者と協同することを受け入れた。それゆえに，つい2ヶ月前，私がまたグループが結成されようとしていることを知らせると，彼は大いに喜んだ。『ブラボー』と叫び，できるだけ生きて闘うと言った。死期が近いことを感じながら，・・・彼の顔は信念に輝いていた」。

実際，ボージャルダンは病をおして，1927年に再び『ル・リベルテール』に，ペンネームを「一凡人Quelconque」に変えて，若干の記事を寄せた[5]。

(2)『ル・リベルテール』への執筆

『ル・リベルテール』において最初にボージャルダンの執筆が見つかるのは，1896年3月14-21日号である。『ル・リベルテール』創刊から4ヶ月と比較的早い時期での執筆であるが，おそらく同紙の個人主義的アナキズムの論調とは合わなかったのであろう，寄稿は単発的であった[6]。また署名も実名であった。

「バルバッスゥ親父」の名による「一農民の随想」がスタートするのは1904年末である。この11月末から翌1905年1月末にかけて，そして1905年もほぼ同じ11月末から翌1906年2月半ばまで，その時々の政治問題を論じた文章を寄せている。

毎回テーマをきちんと明示するコラムの形式が整ったのは，1907年1月である。その後，連載のない時期もあるが，1910年には掲載回数が年30回を超えるに至った。「権力のヒエラルキー」などの政治論，「議会主義的社会主義の破産」「ジョレスと選挙民の心理」などフランス統一社会党批判，「ストライキのあとで」などブリアン内閣や共和派の労働者弾圧批判の他，10回にわたって宗教問題を論じている。

本論が対象とする1911～12年になると，バルバッスゥ親父の登場は4週に一度程度と減少し始め，1913年3月を最後にコラムは姿を消す。以後，先に触れた1927年の数回の寄稿を除いて，ボージャルダンが『ル・リベルテール』紙に執筆することはなかった[7]。

このように，長いブランクをも含めると，ボージャルダンと『ル・リベルテール』との関係は30年余にわたっている。「バルバッスゥ親父」の名による執筆だけに限っても10年に及んでおり，『ル・リベルテール』読者にとってボージャルダンはまさに「なじみの親父さん」となっていたと言えよう。

そのようなアナキスト親父バルバッスゥが，ある意味突如としてフェミニズム談義を展開したのが1911年から1912年にかけてである。もちろんこの2年間に他のテーマがなかったわけではない。「農村の危機」「直接行動」「鉄道員のストライキ再論」など，それまでと同様，その時々の政治論議を展開しているが，しかしそれらのコラムの中でもっとも大きな位置を占めたのがフェミニズム問題だったのである。

2.「バルバッスゥ親父のフェミニズム談義」

(1)「フェミニズム談義」の概要

冒頭でも述べたように，コラム「一農民の随想」が女性解放の問題を最初に取り上げたのは，1911年3月11日号である。以下，次のように展開する。

「キュロットと女性解放」(1911年3月11日)
「投票用紙と両性の平等」(1911年3月18日)
「主婦か娼婦か」(1912年6月1日)
「フェミニズムの活動」(1912年6月15日)
「フェミニズム問題」(1912年6月29日)
「極端なフェミニズム」(1912年7月13日)
「経済・社会的フェミニズム」(1912年7月27日)
「フェミニスト闘争」(1912年8月17日)
「フェミニズムの勝利へ」(1912年8月31日)
「第三階級」(1912年9月14日)
「女性の連帯」(1912年10月12日)

日付を見ると分かるように，1911年3月に2度，女性問題を扱うコラムを書いた後，バルバッスゥは一旦このテーマを離れて，他の政治問題について執筆しており，また1912年は，1月～5月の間コラムを休んでいる。1912年6月に執筆を再開した後は，10月初旬まで，ほとんどすべてのコラムをフェミニズム論議に当てている。

この11回にわたるフェミニズム関係のコラムは，その大部分が，バルバッスゥ親父と若者ジュール・デュブラックJules Dubracの対話やデュブラックからの手紙の紹介といった形で展開されている。このデュブラックなる若者が，バルバッスゥ親父のコラムに最初に登場するのは，1910年11月16日号の「ブリアンディズム」と題するコラムである。バルバッスゥがデュブラック親父の家を訪ねたとき，酒販売の外交員をしている一人息子のジュールが出張から戻ってきたのに出会った，という設定になっている。この号では，北フランスで見たストライキの情況を話すというのがデュブラックに割り振られた役割であった[8]。

この若者デュブラックが，今回は，フェミニズムを積極的に評価し支持する立場で登場する。バルバッスゥ親父は彼の主張をときには認めつつ，全体としてはフェミニズムの問題点やデュブラックの議論の誤謬を指摘するというのが基本的な構図である。しかし，デュブラックは容易に説得されることはなく，むしろ回を重ねる毎にそのフェミニスト的主張が強固になっていくのである。論点に沿って内容を紹介しよう（以下，フェミニズム談義のコラムの日付を本文中に記し，注はつけない。）

(2)「フェミニズム談義」の論点

①女性の服装と女性に対する暴力

1911年3月11日，デュブラックが「キュロット」と「痴情犯罪・性暴力」を取り上げて女性解放の必要と女性参政権の重要性を説くことから，一連のフェミニズム談義がスタートする。

「キュロット」をフェミニストと結びつけて論じること自体は，20世紀初頭においてとくに珍しいことではない[9]。それは，なによりもフェミニストを「おとこ女」としてカリカチュアライズする道具立ての不可欠の一部であった。しかし，デュブラックがこれを

取り上げたのは，キュロットの意味を肯定的にとらえるためである。パリジェンヌたちがキュロットをはくようになっているのは，流行などではなくて，「女性が解放を望んでいること，男性の快楽のための動物，あるいは男性の召使いなんてもうごめんだと女性たちが主張していること」を示すものであるとデュブラックは語る。それは，ロンドンのサフラジェット，ヴェールを脱ぎ捨てようとするイスラム女性の闘いと同じ意義をもつもの評価されている。

バルバッスゥ親父の方は，この最初の2回のコラムでは女性の服装についてなにもコメントしていないが，1912年6月にコラムを再開するにあたって，まさにこの服装問題から書き始めている。

そこでは仕事とそれなりの賃金を得たいために「粗末な男物を身につけ，男性になりすました」若い女性の悲劇が紹介されている。この娘は路上で警察官に捕まり，身体を確かめられるという屈辱的な目に遭ったのである。「こんなことが20世紀に起こっていいのか。」とバルバッスゥは憤慨する。窮屈なコルセットや引きずるスカート，じゃまになるだけの巨大な帽子など，「良識に反するこのような格好，めまぐるしく変化するが，いつもろくでもないモード，これこそ女性の劣位と隷従を表象するもの」だと言い切るのである。

他方，性犯罪，痴情の犯罪に関しては，いわゆるゴシップ記事（パレルモのホテルで某男爵が愛人を殺害した事件）を話題に話が始まるが，3月18日号でデュブラックはいみじくも次のように述べて，この問題の重要性を指摘する。

「もし嫉妬や性暴力がなくならないなら，共産主義なんて不可能なことです。・・・南アメリカのパンパでの共同生活の実験，コルシカの経験，・・・同様の興味深い試みが失敗したのは女性の問題に関わっていました」。

デュブラックは，20世紀初頭にアナキストたちが各地で行った共産主義共同体（コロニー）の試みの失敗を引き合いに出して，セクシュアリティと暴力の問題に注目しているのである[10]。

「どんなカップルの場合でも，しばしば，暴力を振るう男と被害者の女性がいます。これは一般的には情念と財産の差異によるものです。」（1911年3月18日号）と性暴力の遍在を指摘し，そこでは「男性が女性を所有するモノと見なし，快楽のための肉だと考える」（1911年3月1日号）がゆえに，女性を殴ることが当然視されていると言う。バルバッスゥもまた，「結婚した女は，彼女のどんな些細なふるまいをも監視する主人をもち」，「結婚していない女は，一人で町を歩く権利もない。そんなことをすれば卑劣きわまりない警官に捕まり，署に連れて行かれて屈辱的な性検査を受けさせられる」のであって，「あらゆる点で女性は奴隷である。」と述べる（1912年6月1日号）。父親，夫，警察は，いつでも女性に暴力をふるい，ときには殺す権利さえ持っているのである。

このような奴隷状態から女性を解放するためにこそ，参政権が必要なのだとデュブラックは主張する。

「女性に投票権を与えることは，男性と平等な力を女性に与えることです。そうなれば，男性は女性を家畜や快楽用動物ではなくて，ちゃんと重んじて話し合い討議しあうべき相手，意思と知性とを備えた人間だと見なすようになるのです」（1911年3月18日号）。

参政権は女性の解放に本当に役立つのか。アナキストとフェミニストとの間の，バルバッスゥ親父とデュブラックの間の意見の対立がここに集中する。

②女性の参政権

バルバッスゥのこれに対する考え方は，連載がスタートする1911年3月11日号に既に述べられ，以後基本的には変わらない。

「投票というのは，要望の，意思の表明でしかない。実際に行われている投票は，・・・この意思を何らかの指名代理人，例えば代議士，市評議員などの手に委ねることである。男性たちが手にした選挙権は，一方の性のものでしかないのに不当にも普通選挙といわれているが，この選挙権がもたらす結果は，奴隷たち自身が奴隷制を承認し裁可しているということにすぎない。女性がみずからの主人となるために，彼女たちに投票権を付与したとして，それが一体なにをもたらすのか。それはなんの役にも立たないよ」。

ここにあるのは，選挙を否定するアナキストの原則的な立場そのものである。いわゆる「普通選挙」は，「主権者」と呼ばれるが実際は奴隷にすぎない人民を，騙して眠らせる手段でしかなく，選挙民は自分で自分に主人を与え，投票によって権力を支える保守主義者だとして，アナキストは「意識的な」棄権を強く訴えていた[11]。バルバッスゥはこの立場を繰り返すだけである。それに対して，デュブラックは女性問題の特殊性を論拠に訴える。それが明確な形で示されるのは1912年7月27日号からである。

「投票用紙がもたらす政治的結果はまやかしであるという点で，私も同じ意見です。男性がそこから期待できるものは，なにもありません。この点ではあなたに賛成しますが，しかし，特殊な観点に立って，女性の投票権がもつ特殊な問題を見ておきたいと思います。この観点とは政治的なものというより，むしろ道徳的なもので，この点においてこそ女性の投票権は論じられなければなりません」。

デュブラックが挙げるのは，劣位に置かれ諦観して生きることを余儀なくされてきた女性たちが，その不正に気づき，自らの足で立ち上がる，そのための契機としての意義である。一言で言うなら，選挙権の「意

識覚醒」効果ともいうべきものである。

「投票権が女性に与えられれば，世間が女性を，男性と同じ権利をもつ有能者と見なすようになるだけではありません。女性自身が自分たちをより優れた者と考え，尊厳と解放へのエネルギーを獲得するようになるでしょう」(1912年7月27日号)。

さらに1912年8月31日号では，女性の選挙権がすでに実現している国での成果として，「女性が新聞やパンフレットを読み，集会に参加し，公的生活に立ち現れるようになっている」こと，「女性たちが自分たちの考えを省察・整理し，自ら学び，組織をつくるようになっている」ことを挙げ，女性が選挙に参加することの「主観的な面での効用」，女性の集団的意識覚醒への強力なインセンティブを強調している。

それゆえにこそ，選挙権は「世界中の女性たちの全国的・国際的集結点として役立つという点で，極めて有益なもの」と考えられているのであり，デュブラックは，後述するフェミニズムに関わらせて，「女性の投票権を無しにすることは，フェミニズムの首をへし折ることです。」(1912年8月17日号）と強い口調でバルバッスゥに反論するのである。

さらにデュブラックは，「形式的であれ，女性の投票権があれば，両性の間の闘いは家庭の外部に向けられ，家庭が修羅場になることも少なくなるでしょう」(1912年8月17日号）と述べて，投票権が，アナキストのめざす社会変革に向けて，男女が協力するためにも必要だと主張する。

もちろんこのようなデュブラックの論理にバルバッスゥは屈するわけにはいかない。「投票用紙は子供だまし」(1911年3月18日）と繰り返し，「腐敗した政治に取り込まれるのは避けなければならない。サフラジェットに夢中になるべきではない。」(1912年7月13日）と警告する。しかし，バルバッスゥは，男女平等の参政権を認めないわけではなかった。「結局のところ，女性だからといって男性の選挙人より悪いわけではない」とし，「実際のところ，デュブラック君が望んでいるのは，女性が公的な生活に参加することであり，この点では私も同意見である。・・・女性たちは投票し，組合や組合連盟の中で活動するべきである。」(1912年8月17日）と書く。

このバルバッスゥ親父＝ボージャルダンの女性参政権問題への姿勢は，アナキストの中では決して一般的とは言えない。後述するように，アナキストの女性参政権運動への偏見・批判は，ある種露骨なセクシズムの表現ともいえるものだったからである。そしてこの女性参政権に関するバルバッスゥの議論の誠実さ，「真摯」な態度は，フェミニズムのとらえ方や女性の経済的解放の主張において，さらに一層明確である。

③女性の経済的解放

1911年3月18日号で，バルバッスゥはデュブラックの女性参政権支持に対して，「男性の養われ者として存在するのをやめて，個人としての人格を獲得するためには，自分で稼いで生きなければいけない。参入した様々な職業において，少なくとも男性同僚と平等でなければならないし，同じ仕事に対して同じ賃金を支払われなければならない。分かってきただろう。これを実現するのは選挙の分野ではなくて，むしろ労働組合の領域なのだ。」と応えている。バルバッスゥをはじめサンディカリズムに組みするアナキストにとって，女性参政権運動ではなく，「両性に共通の経済奴隷制」との闘いこそが重要であった。

しかし現実には，「同一労働同一賃金」の原則を形式的には認めつつも，「女性は家にとどまるべきで，もし外で働くなら，労働者の家庭は解体することになると，信じている活動家もいます。」(1912年6月29日号）とデュブラックが述べているように，サンディカリストの間には女性労働に対する否定的意見が根強かった[11]。この点では，デュブラックがバルバッスゥ親父を批判する箇所も出てくる。「あなたは，実際，外で働くか，それとも家に閉じこもるかという両極の解決策の間で逡巡しているように思えます。」とバルバッスゥに述べ，家にいても「家庭内の仕事」をする限り劣った養われ者と見なされるいわれはない，とするバルバッスゥに対して，夫への妻の隷属を「農奴」以上の「全人格的」隷属であると指摘した上で，次のように結論する。「ですから，お分かりでしょう，親父さん。女性が外で働くことが緊要なのです。これこそが女性を男性と平等にし，男女の経済的平等と女性の全面的な解放を実現するのです」(1912年7月27日号)。

この女性が男性と平等に職業に就き，平等な賃金を獲得するべきだという原則において，バルバッスゥとデュブラックの間に対立はない。「どの労働取引所Bourse de travailでも，入り口には『労働に性別なし』という標語が掲げられるべきである。」(1912年8月17日号）とバルバッスゥ自身が述べる。問題はその平等実現の闘いをどのように位置づけるかである。バルバッスゥは，現体制のもとでの労働者を「奴隷の最終段階」と考えており，労働における男女平等要求の運動を，この体制を揺るがすものである限りにおいてのみ支持するのであり，それが現体制内での地位と権威の獲得をめぐる「男女の闘い」の様相を帯びている点ではフェミニストの闘いに懐疑的なのである。

④「フェミニズム」をめぐって

「純粋フェミニズムの活動が絶対必要です。」

デュブラックが，このように書いてフェミニズムの必要性を強調するのは，まさに「フェミニズムの活動」という題を掲げた1912年6月15日号のコラムからで

ある。その前号（「主婦か娼婦か」）で，バルバッスゥは，「女性たちは自らの解放を男性たちに頼るべきなのか。・・・いや，決してそうではない。・・・女性の解放は女性自身が成し遂げるべき事業である。」と述べつつ，それでも「女性プロレタリアートと男性プロレタリアートは一致して進まなければならない。」と書いていたが，それに対して，デュブラックはかなり激しい口調で手紙を書くのである。

将来「労働者の全面的解放が輝かしく実現したとしても，女性労働者にとって家に戻るといまだに主人がいるでしょう。・・・労働組合の活動が夫の権威を揺さぶることはないでしょう」。加えて，「主婦や決まった仕事のない農家の娘など，多数の女性には，職業組合の活動が及ぶこともないでしょう。」とデュブラックは書き，だからこそ，「別の活動，別の団体，すなわちフェミニズムの活動と女性団体が必要なのです。」と断言する。そしてそのフェミニズム活動は「ユニセックス」のものでなければならないという。

「社会主義者，サンディカリズム，アナキズムの男性たちは，女性たちに共同行動を求めます。社会主義者の男性たちは，党が権力を握った暁には，女性は権利を獲得し，男性である私たちと同じ自由を享受できるだろう，と言います。同じことを，アナキズムの男性たちは，革命が成就した暁には，と言うのです。これは1789年に用いられた詭弁と同じものです」。

この「1789年の詭弁」は，女性たちが独自の運動と独自の団体をもつ必要を教えるものだとデュブラックは主張し，さらに「最近のストライキでも，男性活動家たちは，ストライキに女性たちの支持を得るため，集会に女性たちを招集しました。もちろんこれはよいことだと思いますが，しかし，この男性主導の集会では，女性の解放や男女の平等を支持するような言葉は一言も発せられませんでした。」（1912年7月27日）と書いて，男性プロレタリアートの裏切りに警戒心を隠さない。

そしてなによりも，女性たちの意識覚醒をもたらしうるのは，フェミニズム以外にないとデュブラックは言うのである。

「闘い，勝利し，権利を獲得するためには，好むと好まざるに関わらず，女性たちは道徳的な力，とりわけ持続する力と意思とエネルギーを十分に備える必要があるでしょう。そして自己を擁護するこれらの力を，女性団体やフェミニズム活動ではなくてどこで汲み上げることができるでしょう。それらこそが，女性の解放に不可欠な集団的精神を与えるのです」（1912年6月29日号）。

これに対してバルバッスゥは，「そうだとも，デュブラック君。確かに君の言うとおりだ，まったく正しいよ。女性の解放は女性自身のなすべき仕事だ。農民解放が農民の課題であるように。だが，これらの多様な運動は，一つの大きな目標，すなわち，私たちがもはや金持ちや役人を叩く必要もなくなり，滅びではなく完成が待つ，神もなく主人もない社会に向けて収斂されなければならない。」（1912年6月15日号）とし，「フェミニズム問題は社会問題に敵対するものではなくて，その一部にすぎない。」（1912年6月29日号）と訴える。

バルバッスゥは，さらに，暴力に訴えるような「極端なフェミニスト」やフェミニストの間の「階級問題」を挙げることで，デュブラックの主張を切り崩そうとする。しかし，デュブラックは，「フェミニズム問題が，現在まで，われわれの間で提起されることはほとんどなく」，「同志たちはそれをどうでもよいことと見てきた」（1912年8月31日）状況があり，「あなたの楽観的予想にもかかわらず，もし女性が諦めていれば，男性プロレタリアートは男の排他的な利益のためにだけ革命を行うおそれが，常にある」（1912年7月27日）のだから，「フェミニズムが，ときには極端に思えるほどエネルギッシュに運動を進めることが緊要ではないでしょうか。」と反論する。

「階級問題」について言えば，バルバッスゥが，フェミニズム新聞として有名な『ラ・フロンド *La Fronde*[13]』を例に出して，そこで働く女性労働者と雇い主のブルジョワ女性の間の対立を例に，「男性の間にも女性の間にも『階級闘争』が存在することを忘れないでもらいたいね。」と述べるのに対して，デュブラックは次のような指摘を行っている。

「性を示す形容詞をつけずに『プロレタリアート』とだけ言うのでは，男女の現状から言って，虚偽ではありませんか？　実際のところ，包括的にプロレタリアートと呼んでいるもののなかに，一方が他方の主人であり，奴隷であるような人々がいるのです。夫の権威と妻の服従があるのです。で，どうして主人と奴隷が同じ一つの階級を構成することができるでしょうか」（1912年9月14日号）。

そしてデュブラックは女性を「これまで認められてきた2つの階級，ブルジョワジーとプロレタリアートと区別される一つの階級」という意味で「第三階級 Tierce Classe」と呼ぶのである。アナキストや「自覚的なプロレタリア」が男性の特権を放棄し，フェミニスト運動の正義を認めて，「プロレタリアート内での男女の闘いを短期間で終わらせる」ことができるし，そうしなければならない。

デュブラックにとって，女性解放は先送りにされるべきものでなく，「いま，ここで」なされなければならないのであり，それが革命への道を切り開くのである。「女性に現実の平等を与えることが重要なのです。それこそが，資本主義に打ち勝つために必要なプロレタリア両性の統一の条件ですから」（1912年9月14日号）。

「平等において和解し統一した両性は，プロレタリアートの力を2倍にして，一緒にもう一つの勝利，今度こそ決定的な，労働の資本に対する勝利へと向かって進むでしょう。」(1912年8月31日号)

しかし，アナキスト・バルバッスゥのフェミニズム談義は，デュブラックの主張の勝利で終わるわけにはいかなかった。

「女性の解放も，子どもの天国も，神もなく主人もない社会，すなわちアナキスト的共産主義においてしか決定的なものにならないのを，どうして忘れてしまうんだい？だからといって，それまでの間，環境を浄化し，地平を広げて居場所を少しでも耐えやすいように，かき分けて進むのを止めるべきだというわけではないけれど」(1912年10月12日号)。

11回にわたって闘わされた議論を締めくくるには，このバルバッスゥの「まとめ」は，あまりにも抽象的で，気弱であり，説得力に乏しい。

3.「バルバッスゥ親父」のフェミニズム

(1) アナキストにおける反フェミニズム

「バルバッスゥ親父のフェミニズム談義」が連載された時期は，フランスにおける女性参政権運動の「山場」に当たっている。1904年，国際婦人会議のベルリン会議にあたって創設された「国際女性参政権同盟IWSA」は，フランスのフェミニストの活動を刺激し，ナポレオン法典百年記念に対する示威行動などが実行された。さらに1908年から1909年にかけて，「フランス女性選挙権同盟UFSF」の設立，女性選挙権を支持するビュイソンBuissonレポートの国民議会提出などが，それまで分散的で弱体であった女性運動の統一化を押しすすめた。1910年春の国民議会選挙には，パリのすべての区で女性の立候補が試みられた。1913年には運動は街頭示威行動へと展開し，1914年春には50万人を超える女性意見投票が実施され，コンドルセを記念するデモンストレーションが大規模に開催される(14)。

このようなフェミニズム運動の発展に，多くのアナキストが否定的な見方を示した。1914年4月11日号『ル・リベルテール』は，「フェミニストが犯す最大の過ちは，女性たちを投票権獲得へと駆り立てることである。」とし，男性たちと「同じ茶番劇を女性たちに演じさせようとする」この運動に費やされる努力・献身を「なんという過ち，なんという浪費！」と嘆いている(15)。

一方，個人主義的アナキストの新聞『ラナルシー *L'Anarchie*(16)』は参政権云々以前に，フェミニズム運動それ自体を否定する。1911年5月11日号に，ペンネームをEmileとして掲載された「女の隷従」と題する記事は，「今，フェミニストや革命家たちの間で，女性に対する男性支配の不正と残忍さを弾劾することが流行っている。」と皮肉っており，「バルバッスゥ親父」のコラムもその「流行」にすぎないものと見なしているようである。この記事では，アナキストとして女性の隷従に対する批判も述べながら，しかし，フェミニストや革命家たちが女性たちを運動に駆り立てることを強く非難する。なぜなら「女性は客観的にではなくてむしろ主観的に（主体的に）奴隷」なのであり，女性解放を阻むのは女性自身だというのが基本的な認識だからである。社会問題としての女性問題という認識はなく，ゆえにフェミニズムを社会運動の枠組みでとらえることもない。この筆者にとってフェミニズムは，「社会のあらゆる偏見に組みする非論理的な運動」にすぎないのである。

この『ラナルシー』が1914年5月7日号に掲載した「女：女性参政権運動家への公開書簡」（執筆者Mauricius）は，反フェミニズム言説の典型例の一つとも言ってよい。そこでは，女性の隷従を嘆き，女性たちの抵抗・反抗を認める姿勢をとりながら，次のように述べるのである。「レースやアクセサリーについてのおしゃべりに興じるのではない，別の役割が，君の人生にあることは認めるよ。しかし，それは，選挙というごみバケツに，君のバラ色の指を突っ込んで権力の切れ端をつかもうとすることではないよ」。「男性の悪いところすべてを『猿まね』しようなんて・・・煙草をふかし，ペルノ酒を飲み，投票し，ポスターを張り歩き，辻馬車を駆る，なんていうのは，黒人たちが文明からアルコールとシルクハットと梅毒しか学ばないのと同じことだと私には思える。・・・ああ君よ，『男性化』しないで，女性のままでいてほしい」。「磨かれた意識的な女性性によって，私たちの苦痛を和らげ，私たちの弱さを支え，私たちの判断を助け，美と解放をめざす事業において私たちの男性性を補完する，姉妹であり恋人になってほしい」。

ここにあるのは，男性が求める「女性性」の対極にフェミニズムを位置づけ，「女性性」の称揚と「おとこ女＝フェミニスト」の揶揄とをセットに展開されるセクシスト言説である。

さらに，もっと悪意に満ちた「からかい」によって，フェミニズムの抹殺をはかろうとするやり方もセクシストの常套手段である。『ル・リベルテール』1905年9月17-24日号一面に掲載されたヴィクトール・メリック（Victor Meric 1876-1933）の「トリコトゥーズ」が代表的な事例だろう。フランス大革命時に政治集会に加わり，略奪や暴動にも組みした女性たち，すなわちトリコトゥーズ（編み物をする女たち）を血に飢えた魔女に擬するメリックは，20世紀初頭のフェミニストたちについて次のように書くのである。

「この人種は今も消滅していない。今日，この女たちはもはやギロチンの回りで騒ぎ立てることはできず・・・，なんと公の集会で男性に対する十字軍を説

き，コンコルド広場で足を踏み鳴らし，ナポレオン法典に火をつけているのだ」。

「復讐の欲望，醜さと無力ゆえの復讐の欲望」が女性たちを突き動かし，彼女たちを「フェミニズムという泥沼に連れて行く。」と述べるメリックは，最後に次のように呼びかける。「トリコトゥーズを消滅させなければならない。シャワー付きのどこかの病院へ閉じこめるべきだ。でなければ，大革命のときにジャコバン派がやったように，鞭打ちの刑に処そう！」。

このようにフェミニストを揶揄し嘲る言葉は，もちろん左右いずれの思潮にも存在した(17)。しかし，個人の自由と解放を高く掲げ，革命によるあらゆる奴隷制の廃止を求めたアナキストにおいて，こうした言葉があたりまえのように発せられたことは，20世紀初頭フランスにおいて，女性解放と社会の根本的変革を結び付けようとしたラディカル派フェミニストがいかに困難な闘いを強いられたかを物語っている。

(2)「バルバッスゥ親父」におけるフェミニズム

上に見たようなアナキストにおけるセクシズムを考えるならば，「バルバッスゥ親父」のある種「フェミニスト性」を指摘することは間違いではないであろう。まず第一に，コラムでは，フェミニズムが単なる冷やかしの対象としてではなく，アナキズムを含む社会変革思想・運動との関係において問われている。デュブラックは多くの活動家の対フェミニストの姿勢を，次のように批判する。

「フェミニズムは家族という基盤を解体する破壊的で革命的な主張であるというように，フェミニズムをちゃんと攻撃するかわりに，馬鹿なんじゃない？と笑って言う男たちについて一言。彼らは，革命理論について，軽薄なものさ，せいぜい暇人向きの御託といったものにすぎないよ，と嘲るリベラル派のブルジョワ社会改良家たちにそっくりですよ」(1912年7月27日号)。

バルバッスゥ親父のコラムは，女性解放の特有の課題があること，しかもそれは単なる「主観的なもの」ではなく，社会問題として革命家が真面目に論じるべきものであることを，あくまで前提として展開している。「フェミニズム問題を否定する無知な人物もいるだろうが，時が経てば，近視であれ老眼であれ，目が見えない者でも，それをはっきり見ざるをえなくなるだろう。」(1912年6月29日号) とバルバッスゥ自身が述べている。

第二に，プルードン的セクシズム(18) からの距離が繰り返し表されている。プルードンの「主婦か娼婦か」は，ここでは女性の本性の問題ではなく，社会が女性に強いるジレンマであるととらえられ，「プルードンの主婦とは召使いのこと」であり，「プルードンのジレンマは，・・・現代的には，召使いかそれとも養われ者か，ということになります。」と言う。そして「このジレンマから女性は道徳的に逃れなければならない」，その道が就労であるとデュブラックは述べている (1912年7月27日号)。プルードンからの引用に対して，それを「偉大な人物の奇妙な錯誤ですね。」と片付け，「私はこのような宿命的論な考え方に従うことを断固拒否します。」(1911年3月18日) と，デュブラックに断言させているのは，言うまでもなく筆者のボージャルダンなのである。

第三のなによりも重要な点は，女性解放という独自の課題があり，それは女性自身のイニシアチブで女性自らが闘うべきものであると，繰り返し強調していることである。

「女性は自らの解放を男性に頼るべきなのか。・・・いや，決してそうではない。性奴隷制，家庭奴隷制は，両性に共通の経済奴隷制にさらに付け加わっているものであり，それを打倒することができるのは，その廃止を望む利害当事者だけだ。男性もまた不幸であるとしても，彼らは特権を持っており，その男性の特権を喜んで放棄することはしないだろう。力ずくでそうさせなければならない」(1912年6月1日号)。

バルバッスゥ親父は，デュブラックの主張をこのようにまとめ，その正しさを認める。そこからデュブラックのフェミニズムへの道のりは遠くない。なぜなら，この女性特有の隷属を打ち破るために女性たちが協同し，闘うエネルギーを汲み取る運動・思想こそ，他でもないフェミニズムだとみなされているからである。

そして最後に，性奴隷・家内奴隷からの女性の解放をアナキストの革命と未来社会への展望のなかに位置づけ，フェミニストの課題は同時にアナキストの課題であることを強調するデュブラックは，まさに革命的フェミニズムのありようを示唆している。

「家族の基礎になっているのは何でしょうか？それは女性の奴隷化なのです。女性が自由になれば，奴隷制度を支えている家族は消滅します。これによって確かに男性は召使いを失います。でも家族というのは，資本主義社会のための人工的な細胞ではありませんか。家族がなくなれば，相続はなくなり，私有財産もなくなります。ですから家族を解体することは，同時に資本主義社会を解体することにもなるのです。

親父さん，革命家たちにとってフェミニズムがいかに強力な助っ人であり，フェミニズムの勝利が，両性のプロレタリアートの全面的な解放に，どれほど大きな一歩をもたらすものか，お分かりいただけるでしょう」(1912年8月31日号)。

以上のようにデュブラックの口を通して語られるフェミニズムが，もし筆者ボージャルダン自身の声だとするならば，ボージャルダンは，プルードン的セクシズムを引き継いだとされるフランス・アナキズム，サ

ンディカリズムのなかの，例外的なプロ・フェミニスト活動家ということになるだろう。

しかし，結局，バルバッスゥ親父は，最後になってデュブラックの優勢をひっくり返すような言葉を付け加えて終わろうとする。「デュブラック君，性の利害が階級の利害に勝ることなどありえないよ。タイタニック号の遭難を思い出してみたまえ」（1912年10月12日号）。

「女性は男性の奴隷である。が，それは奴隷の奴隷であるということである」（1912年6月1日号）という基本的認識を共有しながら，若者デュブラックは前者に力点をおいて「女性を奴隷にしたまま，男性が共に闘おうというのは欺瞞だ」とし，他方のバルバッスゥ親父は男女共通の経済的奴隷制に対する闘いこそ重要だとする。筆者ボージャルダンは，この間で逡巡しているように思われる。

ボージャルダンを躊躇わせているのは，一見すると，フェミニズムの側にある「対男性戦争」の姿勢のように思われる。両性の闘いを前面に打ち出すことで，階級間の闘いを後退させようとするのは，「主人」たち＝資本家の策略であると考えられるからである。フェミニズムを「ブルジョワ女性運動」と呼び，その反動性を断罪した当時の左翼諸派のアンチ・フェミニズムから，ボージャルダンもまた自由ではなかったということなのかもしれない。

しかし，フェミニズム問題に10回を超える連載を捧げたボージャルダンは，男性活動家，男性プロレタリアの「言い逃れ」に組みすることはなかったし，ましてやその悪意に満ちたフェミニスト攻撃に賛同することはなかった。「対男性戦争」は，フェミニズムの側の主張ではなくて，男性たちの側でのフェミニズム定義の方にあること，「1789年の裏切り」を女性たちに思い起こさせるものが，現実の男性たちの運動・主張にあることを，ボージャルダンは気づいていたように思われる。もちろん，アナキストとして，当時のフェミニスト運動にブルジョワ女性の姿が目だつことや，その要求が現状の制度をむしろ維持する改良にすぎないことに目をつむって，フェミニズムを肯定し支持することはできなかった。連載は，おそらく『ル・リベルテール』の多くの読者＝アナキストが期待したように，フェミニズムを否定し，あるいは批判し尽くすこともないまま，先に挙げたように，「神もなく主人もない社会」へのお題目的訴えで終わってしまうのである。だが，最後にそれでも「それまでの間，環境を浄化し，地平を広げて居場所を少しでも耐えやすいように，かき分けて進むのを止めるべきだというわけではない」と付け加えざるをえなかったところに，ボージャルダンの女性解放への思い，フェミニストの闘いへのある種のシンパシーを感じることができよう。

おわりに

19世紀末フランスと20世紀初頭スペインのアナキストの主張をもとに，アナキズムとフェミニズムの関係を歴史的にサーベイしようとしたSharif Gemieは，その結論として，プルードン的セクシズムの影響を過大評価すべきでなく，個々のアナキストによる違いが大きいこと，アナキストのセクシズムは単一・単純なものではないことを強調している(19)。本論の考察も，このアナキストの主張の多様性，躊躇しつつもフェミニストへの共感を示すアナキストもありえたことを示している。確かに，筆者ボージャルダンがフェミニストを具体的に支持した証拠はなく，フェミニズムを本格的に論じた著作物ももちろん存在しない。あくまで「バルバッスゥ親父」のコラムの論調，若者デュブラックの位置づけや発言から推測されるだけである。そして，V.メリックのような悪意のフェミニズム評と，「バルバッスゥ親父のフェミニズム談義」との大きな差が，なにに由来するのかについても，筆者ボージャルダンの生涯や思想がほとんど知られていない状況では，明らかにすることは難しい。

他方で，「バルバッスゥ親父のフェミニズム談義」は，『ル・リベルテール』における女性・フェミニズム問題の扱いという点で，一つの転機を示しているように思われる。バルバッスゥが同紙から姿を消した1913年には，フェミニズム談義最終回（1912年10月12日号）でデュブラックがフェミニストの一人として言及したマドレーヌ・ペルティエ（Madeleine Pelletier 1874-1939）(20)が，執筆者として登場し，ほぼ毎週と言っていいほど頻繁に寄稿し始める。さらに，第一次世界大戦期の休刊を経て再出発する1919年には，紙面に「女性の論壇（Tribune Féminine）」が設けられるのである。この新たな展開についての考察，及びそれを踏まえたさらに長期的観点での『ル・リベルテール』とフェミニズムの関係に関する検討は，次の課題としたい。

註

(1)『ル・リベルテール』は，フランス・アナキズムが相次ぐテロ行為によって特徴づけらる「直接行動の時代」が終わった1895年に，S.フォールとルイーズ・ミシェル（Louise Michel）によって創刊された。第1号は，同年11月16-22日号である。創刊号（2頁）を除き4頁立ての週刊紙である（1923年12月初めから1925年3月までは日刊。日付の記載方法は，本論で見るように2種類ある）。日本においてこの新聞を見ることができるのは，法政大学大原社会問題研究所においてであり，ここには1895年創刊号から1922年1月初めまでが所蔵されている。貴重なこの史料を快く閲覧させてくださった同研究所に，記して感謝したい。

(2) 拙稿「S.フォール『アナキズム百科事典』とM.ペルティエ～20世紀初頭フランスにおけるアナキズムとフェミニズムの接点をめぐって～」『愛知教育大学研究報告人文・社会科

学編』第54号（2005年），127-135頁。

(3) Maitron, J., *Le mouvement anarchiste en France, I, II, F.Maspero, 1975(Gallimard, 1992), Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français Le maitron,* Les Éditions de l'atelier, CD-Rom, 1997. 唯一の著作と思われるのが，1910年出版のパンフレット*La Hiérarchie des pouvoirs ou le pouvoir politique soumis pieds et poings liés au pouvoir capitaliste*で，『ル・リベルテール』1910年5月1日号のバルバッスゥ親父のコラムはこれを紹介している。

(4) *Almanach du Père Peinard,* 1897年に同じくバルバッスゥ親父の名で掲載されたLes veillées du Père Barbassouの5夜話がWeb上で公開されている。
http://bibliolib.free.fr/article.php3?id_article=88

(5) 1927年4月1日号に「フーリエ主義」を，同4月22日号に「トルストイ主義とアンチ・ミリタリズム」を執筆している。

(6)『ル・リベルテール』と同じ1895年に創刊されたJean Graveの『新時代*Les Temps nouveaux*』などと異なり，『ル・リベルテール』は当初サンディカリズムに否定的であった。しかし，1900年頃から次第に態度が変化し，サンディカに非常に敵対的であった個人主義者たちが，1905年，自分たちの新聞『ラナルシー』を発刊して離れて以後は，一貫してサンディカリズムを支持する。Maitron, J., *Le mouvement anarchiste･･･*,pp.274-279.

(7)『ル・リベルテール』におけるボージャルダンの執筆状況については，創刊から1920年代の同紙を一覧したが，見落としもあると思われ，将来訂正する可能性もあることをことわっておきたい。

(8) ジュール・デュブラックはコラムのための想像の人物だと思われるが，モデルが存在するかどうかは不明である。コラムには他にも知識人（元教授）のリュシアン，敬虔なカトリック教徒ジャック，社会主義者の隣人ファルールなどがテーマに応じて登場している。

(9) 挿絵を豊富に含み，必ずしもキュロットをはく女性に対するからかいや拒否に終始していない興味深い著作として，次のものがある。J. Grand-Carteret, *La femme en culotte,1899,* réédition par côté-femmes éditions, 1993.

(10)メトゥロンは*Le mouvement anarchiste ･･･*第Ⅰ巻でこれらコロニーについて論じている（pp.382-408）が，性のトラブルに関してはわずか5行の示唆を行っているだけである（pp.406-407）。ブラジルのコロニーについては，Isabelle Felici, *La Cecilia. histoire d'une communauté anarchiste et de son fondateur Giovanni Rossi,* Atelier de création libertaire,2001がある。

(11)『ル・リベルテール』を始めとするアナキズム諸誌は，議会選挙時には紙面全面を使った「棄権キャンペーン」を張っている。メトゥロンの*Le mouvement anarchiste...*では第Ⅱ巻の理論的考察で，バクーニンやクロポトキンを引用してこの問題を扱っている（pp.143-146）。S.フォールの*Eleteur, Ecoute !*（1919）やOctave Mirbeauxの*La Grève des électeurs*（1919）などパンフレットも多い。

(12)第三共和政下の労働運動，ストライキの研究で知られるM.ペロー（Michel Perrot）は，男性労働者たちの根強い女性排斥の傾向を指摘し，「プロレタリアは，半世紀の間，彼ら自身を締めだすために使われた知性と適性の論法を援用して女性たちに敵対する。」と書いている。ミシェル・ペロー著持田明子訳『歴史の沈黙　語られなかった女たちの記録』藤原書店，2003年，183頁。

(13)Margeurite Durand編集の女性だけで発行されたフェミニスト新聞。1897年12月～1905年3月に継続発行されたほか，1914年，1926年にも一時期再刊された。

(14)この時期の女性参政権運動ついては，S.C.Hause & A.R.Kenney, *Women's Suffrage and Social Politics in the French Third Republic,* Princeton University Press, 1984が詳しい。

(15)これはPierre Martinが「投票権とフェミニズム」と題して書いた記事である。『ル・リベルテール』ではこの1914年4月にMartinとMadeleine Pelletier，Julia Bertrandの3人が女性参政権をめぐる論争を行っている。

(16)注(6)で見たように，1905年4月13日号を創刊号として1914年7月まで発行された個人主義的アナキストが集まる新聞。セクシュアリティ，自由恋愛などの執筆も多い。

(17)M.Perrotの序章で，Christine Bardが編集した著作，*Un siècle d'antiféminisme* Librairie Arthème Fayard, 1999の第一部がこの時期のアンチ・フェミニズムを論じている。

(18)プルードンのセクシズムについて，わが国で早くから取り上げ論じていたのは水田珠枝『女性解放思想史』筑摩書房，1979年（ちくま学芸文庫，1994年）である。プルードンとフェミニストの論争については，鈴木由香里「女性に関する表象の問題―デリクールをめぐって」大越愛子・志水紀代子編著『ジェンダー化する哲学』昭和堂，1999年，116-151頁がある。

(19)Sharif Gemie, Anarchism and Feminism: a historical survey, *Women's History Review*, Volume 5, Number 3, 1996, pp.417-444

(20)ペルティエについては，拙稿「M・ペルティエ（M. Pelletier）における個人主義と女性参政権の主張～第一波フランス・フェミニズムのなかの『過激分子』～」財団法人東海ジェンダー研究所『ジェンダー研究』第3号（2000年），41-54頁などを参照されたい。

（平成17年8月31日受理）